

## 4 論の組み立て：報告型

### 4.1 基本3要素

報告型論文・レポートを記述するときに最も留意する点は“FAO”とよばれる3要素の区別である。このタイプの論文・レポートでは、自分が調べた事柄、調査結果をもとに分析した事柄、考察した結果などとりついた意見などを記述する。なにが事実でなにが意見なのかを区別しておかないと、報告内容が正確には伝わらない。逆に、この区別を意図的にあいまいにした表現が、一般には「詭弁」と呼ばれるレトリックの代表例だ。論述型でも意見対比型でも同様だが、正確に記述するためにはFAOの区別は不可欠である。

FAOとはすなわち次の3要素である。

“F”要素：客観的な事実 (Fact)
“A”要素：事実にもとづいた分析 (Analysis)
“O”要素：自分自身の意見や感想 (Opinion)

たいていの論文ノウハウ本では「事実と意見」の区別を明確にするようにと書かれている。客観的な裏付けが必要な「事実」と、主観的な事柄の表明すらも許される「意見」とでは、たしかに区別が必要なことは明白だ。そして論の組み立てにおいては、根拠のない一方的な意見表明を排除するのが当然の態度であるから、意見イコール理論にもとづいた合理的な結論、すなわち分析結果と見なすことができる。つまり、FAOのうちのAとOを一つの要素としてとりあつかうのだ。

しかしここでは、AとOを分けておくことにする。もちろんそれは、論のなかに根拠のない意見を書くことが好ましい、と指摘したいのではない。執筆者の思い入れや根拠なき意見は論文・レポートにおいては無用の「雑音」にすぎない。しかし、そのような内容を除いたとしても、今後の予想を述べたり政策的な提言をおこなう場合に、執筆者本人の主観を

完全に排除するのは不可能である。総括するパートにおいては、執筆者の意見表明を限定的にはあるが認めるべきだ（と私は考える）。

FAOの区別を理解するために、ひとつの例をあげて説明してみよう。たとえばテーマパークの利用状況を調査したとする。事実・分析・意見の違いは次のような形であらわれてくる。

- ・終日一時間以上の待ち行列ができていたアトラクションが複数存在した。【事実】
- ・年平均を5割以上うわまわる来場者がいたことが、一時間以上の待ち行列を複数のアトラクションで終日発生させた原因であると考えられる。【分析】
- ・すいているアトラクションを探したほうが賢明だと私は考える。【意見】

この例で事実・分析・意見の違いを説明しておこう。まず、観察者が誰であろうと、営業時間内を通じて一時間以上待たねばならないアトラクションの存在を確認できる。ゆえに最初の文は「事実」を示している。そして2番目の文は、入場者数と一時間待ちのアトラクションの数とを統計的に解析すれば導きだせる事柄なので、「(事実にもとづく)分析」とみなすことができる。そして最後の文の場合、「賢明」か否かは論者の価値判断にもとづくことなので、「意見」に分類される。

FAOの区別があいまいな報告書は、場合によっては読者を誤読に導いてしまう。2番目の文の場合、厳密には、解析の方法と妥当性の確認が必要である。一読かりに「……原因だ」というように記述しても、文意を大きく損なうことにはならない。しかし、このような内容を分析としてなりたさせるには、第三者に検証可能であることが大前提なのだ。そうした検証のもとに成り立つ事柄であることを示す意味で、事実とは区別した表現を心がけたい。意見と事実との区別については、すでに指摘した。

## 4.2 報告の基本4パート

FAOの区別を明確にするには、報告書自体を基本要素ごとにわけてしまうのが最も合理的な構成である。報告対象となる調査（あるいは研究）の問題設定は当然必要なので、それを含めて次の4パートが基本となる。

- (i) 概要：調査の目的、対象、方法の説明
- (ii) 結果：調査で得られた事実の整理（F中心）
- (iii) 分析：事実にもとづいた分析（A中心）
- (iv) 考察：分析結果の総括（AにOを添付）

これは論の基本4パートの変形である。(i) 概要と(ii) 結果をあわせたものが現状分析プラス問題提起である。調査の目的が問題提起にほぼ相当する内容だ。(iii) 分析は主張に対応し、(iv) 考察は総括そのものである。論を形成する以上、内容的な展開は論の基本4パートと一致するのは当然だ。

## 4.3 基本三要素と文体

FAOは文体によって区別をつける。通常、文末は次のように表現する。

- (i) Fの文 「だ・である」調で言い切る。
- (ii) Aの文 「……と考えられる」のように受動態表現を基本とする。
- (iii) Oの文 「……と（私は）考える」のように意見の主体を明示し能動態で表現する。

事実は推測の余地が存在しないのだから、「だ・である」で言い切る。「……であろう」「……のようだ」といった推測を示唆する表現は不自然だ。不確定の部分が存在するときは、断定できないという事実を明確に表現すべきである。また、「です・ます」

調のていねいな表現は論文・レポートでは習慣的に使わない。事実の記述では「だ・である」で表現すると覚えておこう。

分析をあらわす文では「……と考えられる」と受動態で表現する。「……と考える」と記述した場合、「考える」主体は執筆者自身だ。このような文は書いた人の主観を示したと解釈できてしまう。分析である以上は、誰が考えてもおなじ結論になるはずなので、このような解釈はさげなければならない。「……と考えられる」という表現は、「誰もが……と考える」の受け身のかたちでもあるが、英語（One thinks that ...）やフランス語（Il pense que ...）ならともかく、日本語の論述では「誰もが……と考える」という表現を客観的分析の文にはあまり使わない。ゆえに、主体を省略可能な受け身の表現によって客観性を示唆するのである。

意見の提示では、「（主体）は……と考える / 推測する / 提案する」のように、主体を明示し行動を能動態で示す。意見では、誰が主張するのも重要なメッセージとなるので、主張の主体を明示しなければならない。そして主体＝主語に対応する結びの語で文を終える。

一般に、論説文やコラム、エッセイなどでは、いちいち「私は……と考える」と示して意見を述べる文のほうがむしろ少ないかもしれない。もちろん、「……であるべきだ」「……でないのはおかしい」「……は納得できない」という文は、本来であれば「……であるべきだと私は考える」「……でないのはおかしいと私は思う」「……は納税者の一人として納得できない」と表現するのが原則である。にもかかわらず意見の主体を略す文が好まれているのは、主体が明白である場合には、あえて文中で明記しなくても意味が通じる日本語の特性がひとつの理由であろう。また、「だ・である」で結んだほうが、文としての歯切れの良さを表現できることもおおきな理由のひとつと考えられる。実際、読み手がFAOを意識すれば、それが事実なのか意見なのかを区別するのは可能だ。

しかしそれは、一般読者の多様な読み方を前提とした論説文などだから許容される表現手段である。正確さが最優先される論文・レポートでは、FAOの区別は厳密におこなわれなければならない。意見であればかならず主体を明記するのが鉄則だ。(この回おわり)

#### 【演習課題 4】

以下の文は、いずれも「事実のように書かれた意見」である。どの部分が「意見」の原因となっているのかを示し、あらためて事実・分析の記述として書きかえてみよ（細かなデータなどは推測値や仮定の値でかまわない）。

課題1：福田総理はサミット明けに大規模な内閣改造を計画している。

課題2：洞爺湖サミットは夏に北海道で開催される。

課題3：北京オリンピックは史上最大規模のオリンピック大会になりそうだ。

課題4：中国本土の聖火リレーは波乱なく進行している。

課題5：アメリカの株式市場はサブプライムローン問題が原因の混乱が続いている。

課題6：DS版ドラクエ5の発売日が迫り、ファンの興奮がますます高まっている。

課題7：ドラクエは男の子向け、FFは女の子向けのゲームだ。

課題8：ドラクエは3作目が最もおもしろい。